

「大腸の癌・ポリープのX線診断と病理」

癌研究会付属病院内科

丸 山 雅 一・著

近畿大学医学部付属病院長

陣 内 伝之助

本書を手にとってみて、今を去る十数年前、胃の早期癌が発見されはじめた頃、胃の微細な美しい粘膜像が放射線診断の先達たちの手によって示され、次々と微小な胃癌が発見された当時のことを感慨深く思い出す。胃癌の診断治療では、世界に卓越した成績を残しているにもかかわらず、わが国の大腸病変、とくに大腸癌の診断では欧米先進国に一步遅れているような感じがするのを、かねがね残念に思っていたのは私一人ではなかったであろう。

大腸の早期癌は胃癌のような扁平型や陥凹型は極めて稀で、大部分が隆起型とくにポリープ型である。ところが、このポリープ状病変を発見することは比較的容易であっても、このポリープが良性であるか悪性であるかを判別することは、極めて難問題である。

著者は2,000例をこえる大腸二重造影法の経験から、なかんづくジャイロスコープを十分に駆使して、本書のなかで、ポリープや早期癌の美しい多数のX線写真を見せてくれ

る。これらの写真から、「1枚1枚のX線写真には、撮ったその人にしかわからない思いが籠められていて、X線写真には著作権があり、作品と呼ぶべきものである」と著者が述べているほどの自信と情熱のあとが偲ばれる。

本書の前半には、大腸のX線検査法の技術論はもちろん、隆起性病変の肉眼的形態ならびにX線診断理論について記載がなされ、後半には良性ポリープ、有茎早期癌、無茎早期癌、進行癌、多発癌などの項目に分けて豊富な症例を掲げ、症例ごとにX線像を肉眼および組織所見と対比しながら明快に解析がなされている。

本書はわが国の大腸ポリープや隆起性病変のX線診断に黎明をつける書であり、大腸癌の診療に携わる者にとって一読に値する書であると思う。

A 4 頁 202 図 24 写真 367
¥ 10,000 丁 280 医学書院刊